

志教育参考資料集

大河原教育事務所管内の偉人Ⅱ
～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～



宮城県大河原教育事務所

書　：　佐藤　奎山　氏

発刊にあたって

昨年度に引き続き、志教育参考資料集「大河原教育事務所管内の偉人Ⅱ～夢をもち、志を成し遂げた郷土の人々～」を管内教育委員会、小・中学校の協力のもとに発刊できましたこと、大変うれしく思います。また、昨年度作成しました第1集は文部科学省のホームページに掲載されるなど高い評価を得ることができました。これもひとえに、関係各位の御協力のたまものと御礼申し上げます。

さて、本県は、1000年に一度と言われる未曾有の災害をもたらした東日本大震災により、多くの困難や苦労に見舞われました。しかし、この経験は「自ら社会で果たすべき役割を主体的に考えながら、よりよい生き方を目指し、その実現に向かって意欲的に物事に取り組む姿勢を育む志教育」につながっていくものと思います。管内には、津波の被害が大きかった沿岸部を訪れ、ボランティア活動をしたり、被災者から体験談を聞いたりした学校もありました。また、多くの児童生徒は、復興に向け必死にがんばっている被災者や支援者の様子を報道により見聞きし、困難に立ち向かう姿に心を動かされています。児童生徒にとって、東日本大震災を経験したことは自分たちの生活・生き方を見直す大きなきっかけとなるはずです。これからは、郷土の復興のため、どんな困難にも負けず力強く生きていく人づくりを進めていくことが重要と考えております。夢と志をもって未来を切り開いていく人材育成を視野に入れ、志教育に係る取組を強力に推進していただくようお願いいたします。

「みやぎの志教育」は、宮城県教育振興基本計画における重点的取組の一つであり、平成22年11月に策定されてから2年が経過いたしました。各学校におかれましては、平成23年度に年間指導計画作成を終え、志教育推進のために様々な実践を積み重ねていることと思います。さらに改善を加えながら、年間指導計画をより実効性の高いものにすることを期待しております。

本冊子では昨年度45名、本年度21名、2年間で計66人の身近な郷土の偉人を紹介することができました。「先人の生き方」を学ぶ教育活動のデータベースとして御活用していただき、志教育推進の一助になれば幸いです。

結びに、本冊子を発刊するに当たりまして、資料を作成いただきました先生方、教育委員会担当者の方々、また、御協力いただきました関係各位に心より敬意と感謝を申し上げます、発刊の言葉といたします。

大河原教育事務所

所長 桂島 晃

目 次

1 発刊にあたって

大河原教育事務所長 桂島 晃

2	大河原教育事務所管内の偉人	市町名	ページ
	齋藤四郎治(さいとうしろうじ)	白石市	1
	渡邊四郎(わたなべしろう)	角田市	2
	堤栄左衛門(つつみえいざえもん)	蔵王町	3
	村上勇吉(むらかみゆういち)	蔵王町	4
	真田幸清(さなだゆききよ)	蔵王町	5
	松山京子(まつやまきょうこ)	大河原町	6
	村井江三(むらいこうざん)	大河原町	7
	三宅義行(みやけよしゆき)	村田町	8
	孝子長吉(こうしちょうきち)	村田町	9
	千葉幸雄(ちばゆきお)	川崎町	10
	佐山吉右工門(さやまきちうえもん)	川崎町	11
	菊池多兵衛(きくちたへえ)	丸森町	12
	鈴木三郎(すずきさぶろう)	丸森町	13
	齋藤富(さいとうあつし)	丸森町	14
	森健次郎(もりけんじろう)	丸森町	15
	須郷武治(すごうたけじ)	丸森町	16
	佐藤寅之助(さとうとらのすけ)	丸森町	17
	男澤三之助(おとこざわさんのすけ) 男澤一男 (おとこざわかずお) 男澤美代 (おとこざわみよ)	丸森町	18
	齋藤喜惣治(さいとうきそうじ)	丸森町	19
	佐藤忠良(さとうちゅうりょう)	丸森町	20
	佐野理八(さのりはち)	丸森町	21

【主な業績】

- ヒダリマキガヤ (イチイ科カヤ属変種) の発見
- コツブガヤ (イチイ科カヤ属変種) の発見
- ヨコグラノキ (クロウメモドキ科ヨコグラノキ属) の北限地帯発見
- サイカチ(サイカチ蔓科サイカチ属)の発見
- カントウマユミ (ニシキギ科ニシキギ属) の発見



今もそびえ立つヒダリマキガヤ

【業績の概要】

白石市小原地区には、国指定の天然記念物がいくつかあります。最も有名なものは「材木岩」ですが、下戸沢地区に現存する「ヒダリマキガヤ」もその一つです。

「ヒダリマキガヤ」は、現在は小原地区下戸沢字町地内 (旧小原国民学校下戸沢分教場) にひっそりと佇んでいます。当初、小原村 (現在は小原地区) 在住の横田氏の所有地でしたが、齋藤四郎治氏 (以下「氏」と呼ぶ) が新種であることを発見し、伐採・枯死等からこの樹を守るために昭和3年に譲り受けたといえます。

当時としては、「ヒダリマキガヤ」は、滋賀県に3株、三重県に2株が認められているだけで、非常に貴重な植物であるということでした。現在では、国指定の天然記念物として保存されています。

また、氏は、当地区で「コツブガヤ」も発見しています。こちらも日本古来の固有種ですが、三重県で、大正13年理学博士である三好学氏により発見され、新種として認められた植物でした。氏が見つけたこの樹は、我が国では2本目の検出であったといえます。今もなお、これ以外の樹は発見されていないことを伝え聞くと非常に貴重な発見だったと言えるでしょう。

さらに、同地区において、氏の発見した貴重な植物は数種に及びます。「サイカチ」、「カントウマユミ」、「ヨコグラノキ」がそれにあたります。「サイカチ」については、小原温泉内の四竈家の宅地内にありました。また、「カントウマユミ」は、小原塩倉地内の高橋家の宅地内にありました。ですが、両木は、前者は火事による枯損、また、後者は自然に枯れて現在はなくなってしまっています。「ヨコグラノキ」については、氏の発見により、当時はその北限地帯として昭和17年に文部科学省 (当時は文部省) により認定されました。こちらは、観光名所として整備された材木岩公園内に現存しています。

発見された樹木等は、いずれも貴重なもので、絶滅を恐れ、その保存を考え、譲渡による保存や天然記念物指定への働きかけなど、氏の数々の活動は賞賛されるべきものと考えられます。

氏は、日頃より地区内の植物に目を落とし、時間さえあれば野山を駆け巡ったといえます。

氏の直接の子孫にあたる齋藤八十八氏 (小原在住のお孫さん) によれば、「傘をさしながら家の辺りや山の中や野原を歩いたり、植物を見たり手に取ったりしながら歩いているのをよく見かけた。通勤の時は、よく本を読みながら歩いていた。笑顔を絶やさないう人だった。」といえます。



報告書内に挟められた植物

また、親戚筋にあたる齋藤敏氏 (奥様が四郎治氏の子孫に当たる) によれば、「聞くとところによると、白石市 (当時は「白石町」) の学校まで通うのに、バスなどは使わず歩いて通っていたようだ。行き帰りには、道すがら植物の採取に勤しみ、観察を絶やさなかったようだ。」ともおっしゃっています。氏の植物に対する愛情あふれる活動は、このような日頃からの地域の自然に対する接し方に表れているのではないのでしょうか。それが、今なお、小原の数々の天然記念物に宿っているように思えます。

当地区内には、氏の功績を称え石碑が建てられています。そこにはこう記されています。

(前略) 先生ハ人生再出発トシテ東京早川植物研究所ニ入り植物分類学ノ大成ニ精進實地研究所ニ挺身セルナリ其間凡十年孜々不倦全ク敬服ニ値ス (後略)

氏は、学校の教育を担う子弟を育てあげた後、植物の分類学に一生を捧げるために荣誉ある職を辞して、研究の道に進むこととなります。自らの意志を貫くその強さは、今なお小原の人々の中に受け継がれています。

【資料提供：齋藤敏氏】

わたなべ しろう 1926年 1998年
渡邊 四郎 (大正15年1月10日～平成10年7月14日)

【主な業績】鉄鉱石中の微量成分の分析法の研究

鉄鋼工場におけるマンガンの分析に関する研究

【業績の概要】

伊具郡東根村小坂字桜木の出身です。東根小学校卒業後、昭和18年3月、旧制角田中学校（現角田高校）を卒業と同時に、船岡海軍火薬廠に入所しましたが、終戦と同時に火薬廠が閉鎖されたことにより、退職せざるを得ませんでした。

昭和20年10月、東北大学金属研究所・後藤研究室に入所し、助手として働きながら、製鉄業に必要な「迅速分析法」の確立のため、研究に励みしました。

昭和29年4月、富士製鉄株式会社釜石製鉄所に入社し、「鉄鉱石中の微量成分の分析法の研究」及び「鉄鋼工場におけるマンガンの分析に関する研究」を行って、学会で発表しました。その結果、京都大学工学部の舟坂教授、東北大学金属研究所の後藤教授の薦めにより、その研究を学位論文としてまとめて京都大学に提出したところ、昭和36年12月26日、“工学博士”の学位を授与されました。

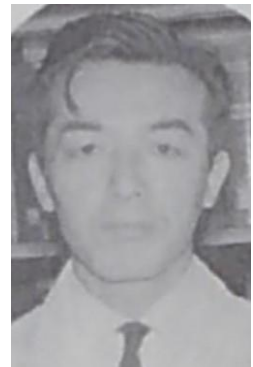
四郎を語る上で重要なことは、工学博士になった事実はもちろんですが、それにもまして、その夢を果たすまでの不撓不屈の精神だと思います。当時、旧制中学を卒業しただけの一サラリーマンが、働きながら勉学と研究に励み、博士となることは並大抵の努力ではありませんでした。東北大学金属研究所勤務時代は、槻木から仙台まで1日も欠席せず8年間通い続け、「分析は渡邊に聞け」という合い言葉ができるほど、頭角を現していきました。釜石製鉄所勤務時代は、寝る間も惜しんで研究に没頭し、原稿用紙800枚にも及ぶ膨大な学位論文を、同僚の協力・助言や夫人の内助の功などの支えのもとに作成し、ついに工学博士となったのです。

退職後は、東京都町田市に住み、第二の人生として臨床検査会社に嘱託として勤務し、アイソトープ(放射性同位元素)を取り扱う仕事をしていました。このように、生涯、研鑽と努力を続けた四郎は、平成10年7月14日、75歳の生涯を閉じました。

※ 旧学位令では、“博士”になるのに学歴は問いませんでした。現在、“博士”には、大学院博士課程を卒業しなければなることはできません。四郎はこの新制度について、「それなりの長所はあると思うが、学歴不問の篤学の士のために旧制度を残しておいて欲しかった」と述懐しています。

(参照資料：角田市東根公民館編集「東根の郷土史～ふるさとの地名・人名」)

【資料提供：角田市立東根小学校】



つつみ えいざ えもん
堤 栄左衛門

1872年 1946年
(明治5年2月7日～昭和21年12月21日)

【主な業績】 地方自治

【業績の概要】

「村長 おれたちの桑畑を取り上げるんですか。」

「村長、馬や牛をみなごろしにするのですか。」

宮村の農家の人たちが、堤村長のところに押しかけてきました。

そして、あっちからもこっちからも激しい文句を言っています。堤村長は、たくさんの文句をだまって聞いていました。

昔から宮村にあった山や林はひどく荒れていました。それで、山へ行って仕事をする人はほとんどいませんでした。中には山や林を借りたいという農家もありました。そういう農家では、桑の木を植えたり、馬や牛のえさにする草を刈ったりしていました。

堤栄左衛門は、大正8年から10年間も、宮村の村長としていっしょうけんめい働きました。堤村長は、この荒れ果てた山や林をなんとか立派にしなければと考えました。貸していた山や林を返してもらい、そこに植林をすれば百年後にはすばらしい緑豊かな山になるだろうと考えたのです。

ところが、山や林を借りていた農家の人たちは、百年後なんかより、今の生活が問題でした。そのため、堤村長のところに毎日のように反対する人たちが押しかけ、今までどおりするように言うてくるのでした。

堤村長は、何回も何回も東京の林野庁へ行って、官行造林（国の山林）にしてくれるようにと頼みました。そして、東京から帰ってくると、夜もろくろく寝ないで、村の人たちに説明して歩きました。しかし、反対している人たちは、堤村長の話を聞こうとはしませんでした。

「みなさん、みなさんの考えはよくわかりますが、今までの暮らしではこれからずっと苦しい生活を続けることになります。それに、わたしたちのふるさとの山は、ますます荒れ果ててしまいます。宮村全体が豊かになるよう、宮村の山林として植林しようではありませんか。百年後には、りっぱに生長した木がたくさんとれます……。」

堤村長の考えに反対していた人たちは、だんだん真剣に聞くようになってきました。

「わたしは、宮村の将来を考えているのです。もっともっと豊かな村にしたいのです。こんな小さい木が太い大木になり、その木材で学校や村のためになるものを作ったら、どんなにかすばらしいことではありませんか。みなさん、わたしに力を貸してください。」

堤村長の目には涙が光っていました。村の人たちも一緒に涙を流し、何度も何度もうなずいて聞いていました。こうして広さ281町3反歩（2,789,753平方メートル）の山が官行造林となりました。その後、昭和32年に宮小学校の講堂がつけられた時には、その時植林した木を使ったということです。



【資料提供：蔵王町立宮小学校】

むらかみ ゆうきち 1868年 1967年
村上 勇吉 (明治元年～昭和42年)

【主な業績】 円田村村長，村会・郡会・県会議員，澄川用水の実現や農民救済に尽力

【業績の概要】

村上勇吉は，通算33年間円田村の村長を務めました。また，村や郡や県の議員も務め，村の発展に貢献しました。

村上勇吉がした大きな仕事の一つが澄川用水の実現です。円田村では古くから水田用の水が不足していました。同じように隣の村田町や沼辺村(現村田町)でも水不足に悩んでいました。その解決策として，三町村で相談し，蔵王の山々を水源とする澄川から水を引こうということになりました。

工事は昭和4年(1929年)に始まり，途中，経済的に苦しい農民を救うため，県にお願いして工事に農民を参加させました。地元農民は経済的に大きな助

けとなり，精を出して働きました。延長約15キロメートルにわたる澄川用水は，工事開始3年後の昭和6年(1931年)に通水を開始しました。水路を勢いよく流れる水を見て人々は大喜びをしたそうです。澄川用水の完成によって，3町村で約800ヘクタールの水田に水が送られ，それまで多かった水引きによる争いはなくなりました。

その後遠刈田に水力発電所が作られ，用水を使用するようになり，昭和16年(1941年)にサイフォンを通してあふれる水を澄川7対黒沢尻3の割合で自然に分ける分水工が，いぼ岩に設置されました。(平成24年(2012年)に土木遺産として認められました。)

そのほか，村上勇吉は，冷害で苦しんでいる農民を救うため，刈田郡救済事業を行うとともに，個人としてお金を借り，外国からお米を買い，これを農民に無料で貸したり，円田村を通る軽便鉄道の開通に協力したり，分校になっていた平沢小学校を独立させたりしました。

村上勇吉は「村勇」の愛称で呼ばれ，村民からとても慕われていました。一度引退した後，

昭和22年(1947年)に戦後初めて行われた円田村の村長選挙で，円田村の人々にどうしてもお願いされ，80歳を過ぎていましたが立候補し，村長になりました。

村上勇吉は，昭和34年(1959年)に蔵王町で最初の名誉町民に選ばれています。また，戦前と戦後の2回，国から勲章をいただいています。

村上勇吉の銅像は，今も澄川用水が流れる円田地区の水田を静かに見つめています。



円田公民館(旧円田村役場)に立つ村上勇吉の銅像



いぼ岩にある分水工

【資料提供：蔵王町立円田小学校】

さなだ ※ゆききよ 1800年 1871年
真田 幸清 (寛政12年 ~ 明治4年)

【主な業績】読書や習字など，地域の教育の普及に貢献

【業績の概要】

仙台真田氏第八代当主幸清は，実は仙台真田氏分家^{のぶとも}信知の長男です。

文化6年（1809年），宗家の七代目当主^{のぶよる}信凭が病没，後継がいなかったため宗家の養子となり家督を相続しました。

安政2年（1855年）幸清は，刈田郡矢附村の真田在郷屋敷において寺子屋『真田塾』を開きます。科目は読書と習字，文久2年（1862年）の時点で門弟50名が在籍していました。当時の寺子屋では，子どもたちに「読み・書き・そろばん」を教えるところが多かったのですが，この寺子屋『真田塾』では，年齢層も幅広く，儒教も教えていました。江戸後期から新たな時代の幕開けを迎えようとするこの時期に，蔵王地域の今後の発展を考え，人々に教育を普及させようと強く望んだ幸清は，広く地域の人々に儒学を通して，どのように生活し，どう生きるかなど「生き方」を説いてたようです。真田塾の開校期間は，8年間で文久3年（1863年）に閉校しました。

明治4年（1871年）幸清が死去。その翌年，矢附村川原畑に幸清の筆子塚が建立されました。当時，寺子屋や習い事の師匠が亡くなると，その門弟たちによって筆子塚と呼ばれる供養塔が建てられることがありました。幸清の筆子塚も真田塾の門弟たちが建てたものです。

この碑には，『左衛門^{さえもん}左幸村^{のすけゆきむら}十世』と刻まれています。260余年の長きに渡り秘匿してきた幸村との関係を，明治の世となってようやく公表することができたのです。この筆子塚は，単に幸清の功績を伝えるものであるばかりではなく，仙台真田氏の歴史にとってきわめて重要な転換点～『幸村の血脈を伝える一族であることの公表』を示すものなのです。

【参考文献】

「仙台真田氏と真田^{ゆきむら}幸村の関係を公にした，
記念すべき遺構：真田幸清筆子塚」について

〈 真田幸清筆子塚の場所等 〉

所在地 蔵王町大字矢附字川河畑
所有者 個人所有
公開日 いつでも
料金 無料
アクセス ミヤコーバス
『松川橋』停留所から徒歩10分

さなだゆききよふでこづか
※真田幸清筆子塚

- ・幸清の読み方は正確に伝わっておりません。この度は仮に「ゆききよ」と読みました。ご異論等あるやもしれませんが，ご了承ください。
- ・幸清の家督相続代数は8代目ですが，この筆子塚では10世となっています。これは，仙台真田氏初代は片倉守信（真田大八）であり，幸村を基準にした場合は1代加算され，さらに4～5代目間の廃嫡男子（信広）も1代として加算しているためと推測されます。

【資料提供：蔵王町立円田中学校】

まつやま きょうこ
松山 京子 (明治39年～平成16年)
1906年 2004年

【主な業績】 伝染病の防止・撲滅など地域医療の向上及び住民の健康増進に献身的に尽力
第16回医療功労賞(読売新聞社主催。厚生省，日本国際連合協会等後援)
第28代県民の母受賞
金ヶ瀬小学校及び金ヶ瀬中学校(昭和24年4月～平成3年3月)の校医

【業績の概要】

三重県生まれ。東京女子医専(現東京女子医大)を昭和10年卒業後、同郷の東北大学名誉教授松山徳蔵さんと結婚しました。その後、宮城県衛生課に勤務し、昭和16年、宮城県大河原保健所を辞職、家族が疎開していた大河原町小山田地区に診察所を開きました。保健所勤務当時はトラホーム・栄養失調・寄生虫などの患者が多く、これを無くすにはきめ細かい指導しかないと決意して開業しました。

そして、当時無医村であった金ヶ瀬村からぜひ来て欲しいとの要望を受け、昭和23年、金ヶ瀬村に小児科専門の医院を開業しました。

戦後間もない頃から、金ヶ瀬小学校及び金ヶ瀬中学校の校医を務め、トラホームや寄生虫追放に尽力され、昭和25年～28年の4年間続けて金ヶ瀬小学校を宮城県の健康優良校に育て上げました。松山先生は「お金のない人でも分け隔てなく診察した。その当時、患者さんはお米やジャガイモ等をお金の代わりに持参していた。」とのエピソードも数多くあります。また、伝染病の赤痢が流行した時、金ヶ瀬小学校の体育館を病室にして大勢の人命を救うなど地域住民のため、日夜、現状把握に努め臨機応変に対応されました。

この他、平成に入るまで、毎月数回のペースで仙南一帯において精力的に講話を行いました。伝染病や成人病などの防止や対策などの相談に親身に応じたことから、地域ではとても人気のある講話でした。

平成16年98歳で亡くなりましたが、先生への感謝の気持ちは、金ヶ瀬地区だけではなく、大河原町内はおろか仙南地域そして県内外に広まり、昭和62年12月20日、医師松山京子先生を称賛すべく書籍「慈愛」が369名の寄稿により地域の人々(慈愛刊行委員会)の手で刊行されました。そして、同日、金ヶ瀬公民館にて出版記念パーティーが催されました。その後、基金ができ「慈愛表彰委員会」を発足し、地域の文化活動に貢献した方々を表彰しています。

【資料提供：大河原町教育委員会】

むらい こうざん
村井 江三 (寛政8年～明治3年)
1796年 1870年

【主な業績】

江戸時代末期に活躍した仙台藩を代表する俳人です。芭蕉に心酔し、郷土の俳諧の発展に努め、多くの書画・句集を残しています。白石のしょうそうおつに松窓乙二、仙台のえんどうあつじん遠藤日人ともに東北の三俳聖とも言うべき傑物で、郷土芸術の先駆者的存在です。20歳頃に家塾を開き、寺子屋の先生となり、多くの庶民に書道等を教え、その門下生から寺子屋を開設するものも輩出しています。

【業績の概要】

江三は、寛政8年（1796年）、大河原町本町の村井家に生まれました。姓を村井、名を兵治とし、号を「一日庵江三」と称しました。江三は、少年の頃から学を好み、俳句を愛し、松尾芭蕉を崇敬し続けました。

20歳頃（文化13年）から家塾を開いて寺子屋の先生となり、当時大河原の一平民が寺子屋を開いたのは江三のみでありました。

25歳頃（文政4年）から諸国に吟行の旅を続け文人墨客と交わり修行しました。山形、会津から羽後をかけて江戸や京都に遊び、文政10年頃に大河原に帰郷してからは、山形や上山をはじめ各地の句会に招かれ、その判者となり活躍し、多数の俳句同好者を指導しました。

天保（1830年）から安政年間（1859年）にかけて藩内俳壇の旗頭であり、郷土の俳人にとどまらず、中央俳人との交流もあり、全国的な活動も見られます。大河原の俳諧は、江三という俳匠を得て花開き、実を結んだと言えます。

その当時、文化から文政年間頃に活躍した多くの俳人は、概して与謝蕪村の流れを汲み美感覚に捉われていましたが、江三は芭蕉に私淑し、正風の寂びを追求しました。江三はまた、鳥羽絵、浮世絵風の絵を好み、書においても漢詩をよく作詠して書き、当時の大沼屋（現竹川家）等に所蔵されていました。

江三関係の俳書には、江三編集による「筆塚集」（天保11年）、「草つき」（弘化3年）、「むつのゆかり」、江三のぼつ跋のある「三月越集」（安政6年）、「続月夜塚集」（慶応3年）、江三自身の句集「うぐいす笠」（嘉永元年）などがあります。

「うぐいす笠」は、葦神山麓に芭蕉の句碑『鶯の 笠落としたる 椿哉』を建立した時の記念に発刊したものです。

晩年は、家督の吉兵衛が放蕩のため財産を無くし、隣の相馬屋の2階に一室を間借りするなど物質的には貧しく隠遁的な生活を送っていました。明治3年5月28日に病没しました。

【資料提供：大河原町教育委員会】

みやけ よしゆき
三宅 義行 (昭和20年～現在)

【主な業績】メキシコシティオリンピック重量挙げ男子フェザー級銅メダリスト
ロンドンオリンピック重量挙げ女子48キロ級銀メダリスト三宅宏実のコーチ

【業績の概要】

三宅義行は、昭和20年（1945年）村田町沼辺に生まれました。

6歳年上の兄は、後に東京オリンピック、メキシコシティオリンピックで金メダリストとなる三宅義信です。

貧しい中でもすくすく成長した義行は、重量挙げで華々しい成績を収める兄の姿を追いかけ、高校に入ると、自分も重量挙げの世界に飛び込みました。義行が入学した大河原高等学校には重量挙げ部がありませんでしたが、自らウエイトリフティング部を作り、兄に追いつこうと厳しい練習を始めたのです。

その後、義行はどんどん力をつけ、大学に入ってから数々の記録を残しました。

そして、ついに、昭和43年（1968年）に行われたメキシコシティオリンピックで銅メダルを取り、金メダルの兄義信と表彰台を共にしたのです。

スピードとパワーで兄に勝る義行は、翌年のワルシャワ世界選手権で優勝、さらに、ミュンヘンオリンピックの前哨戦であるリマ世界選手権でも優勝しました。ミュンヘンオリンピックが行われる年に開催されたプレオリンピックでも優勝し、世界王者の兄をして「まもなく義行の時代が来る」と言わせるほどの活躍でした。

昭和47年（1972年）に行われるミュンヘンオリンピックでは、表彰台は確実と目されていたが、オリンピックを5ヶ月後に控えた3月末、練習で右足靭帯を切ってしまいました。奇跡的に復活し、オリンピック代表選考会に臨みましたが、けがの影響で記録は伸びず出場権を逃してしまいました。

その後、足のけがで思うように練習ができないことによるストレスなどがたたり、胃潰瘍を患い手術を受けます。不屈の男は、手術を受けた体で練習を再開しましたが、その影響は大きく、再びオリンピックの表彰台へ…という夢を叶えることができないまま現役を引退しました。

それから二十数年…、人生の目的を失いかけていた義行でしたが、偉大な父の背中を追って重量挙げの世界に飛び込んだ長女・宏実が、義行の重量挙げ魂に再び火をつけました。不屈の男・義行は、再び重量挙げの世界に戻ることになったのです。今度は宏実のコーチとして…。

平成24年（2012年）、宏実は、集大成と位置づけた3度目のオリンピック（ロンドン大会）で、見事日本新記録で銀メダルを取り、親子二代でのメダリストとなりました。

兄に勝るとも劣らない潜在能力を持ちながら、けがや病気に夢を絶たれた義行でしたが、その夢は娘・宏実が受け継ぎ、二人三脚でとうとうその夢を果たしたのです。

「大きな夢をもって、長く続けて欲しい。一生懸命やれば、必ず大きな答えが出るから。」

義行が、後輩である村田の子どもたちに向かって述べた言葉です。



【資料提供：村田町立村田第二小学校・村田第二中学校】

こうし ちょうきち
孝子 長吉 (生没年不詳)

【主な業績】

身体の不自由な父に孝行をつくして村の評判となり、宝暦2年(1752年)、仙台藩主伊達宗村公からその孝行を賞して金十両を与えられました。長吉の孝行の話は、明治・大正時代の尋常小学校の教科書(尋常小学修身書巻五・生徒用, 明治25年3月16日出版)に掲載された実話です。当時の子どもたちの手本とされた人物です。

【業績の概要】

「孝子長吉の碑」が谷山の奥、木立の繁る静かな場所に建てられています。この長吉は、村田町足立一の沢の生まれです。父を長五郎といい、一家は農業で暮らしを立てていました。家が貧しい



ため、母は村田の商家、山田新五郎宅で住み込みで働き、そこからの賃金を家の暮らしの足しにしていました。そのうちに、母が病気になる、寛延2年(1749年)仕事を辞め家に帰りました。その頃、父もまた病気になる足腰が立たなくなり、父と母が病床の人となりました。このとき長吉は数え年8才で、現在ならば、小学校1年生の年頃でしたが、毎日山に入って枯れ枝などを集めて薪木をつくったり、松やにを採ったりしていました。それらを村田の町まで運

んで売り歩き、わずかばかりの金で豆腐のからを買って、家にあるわずかな米と混ぜて父母に食べさせ、その残りを自分の口に入れてやっとならぬをしのぎました。このようにしているうちに母の病が治りました。

しかし、母は事情があつて長吉と父を置いてこの家を出てしまいました。長吉は病気の父を見捨てることはできません。家に残つて一切の家事をやり、病気の父に尽くしました。朝と晩は火をたいて父を温めました。9才の夏から近所の家々の売り板を運ぶ事を頼まれ、これを背負つて村田の町まで一日に2回ぐらい運んでその駄賃をもらつて生活の足しにしました。また、村田の町で紅花の乾かし方を手伝つたり近くの農家の仕事に雇われたりしました。やがて父の病気が快方に向かい宝暦2年(1752年)ごろ父の病気がはば治りました。足立地区の人々で長吉の行いに感心しない人はありませんでした。時々、米などを送つてこの親子を助け、励ましていました。そして村役人一同が、連名で長吉の善行を記し藩に表彰を願い出ました。この年の12月、藩主伊達宗村は長吉に金10両を与えて、その孝行を賞しました。

明治20年4月足立の有志の人々は「孝子長吉の碑」を建ててその徳を顕彰し、大正2年11月に一の沢の屋敷跡に碑を建ててその善行を讃えています。

【資料提供：村田町教育委員会教育総務課・歴史みらい館】

ちば ゆきお 1931年
千葉 幸雄 (昭和6年3月23日～現在)

【主な業績】 作詞家として地域の発展に貢献

【業績の概要】

千葉幸雄氏は昭和6年東京都港区で生まれました。父が川崎町出身で川崎町には伯母が暮らしていましたが、伯母には子がなく昭和10年伯母の養子として川崎町に移住しました。

小さい頃から「詩」が好きで、暇を見つけては「詩」ばかり書いていました。

昭和30年当時コロムビアレコード専属の、石本美由起氏に師事し、川崎町を生活の本拠地としながらも、石本美由起氏の手伝いをしながら、指導を受けていました。兄弟子には、星野哲郎氏もおり、多くの作曲家や、歌手の人たちともかかわることができ、様々な経験をすることが後の詩に生かされています。

昭和31年8月デビュー作「利根の明月」は作曲家倉若晴生氏との作品で、藤田まさと氏から、素晴らしい作品と評価されました。これまでに、県内各地の校歌、社歌、町民歌、団体歌、音頭、小唄、CMソングなど世にでた作品は300詩以上に及んでいます。

また、昭和39年から東北放送、NHKの連続ラジオドラマの放送台本も手がけ、活動が多岐に渡り、地域に与える影響は大きなものでした。

昭和51年1月から12月までの、毎週水曜日河北新報朝刊に、詩52篇を連載し、昭和54年には「水たまりの歌」と題して詩集が出版されました。

その頃の宮城県では、祝いの席で数々の民謡が歌われていましたが、千葉幸雄氏は、「民謡は勿論素晴らしいが、誰でもどこでも歌える祝い歌はないのか」と、自問自答していました。

昭和57年東北放送のラジオ番組「民謡でごきげん」とクラウンレコードがタイアップして詩を公募していたことを知った千葉氏は、「祝い船」を応募、見事第1位となり、曲が付けられました。

昭和60年1月「祝い船」が全国に発売されると大ロングセラーとなり、多くの方から親しまれNHKのど自慢大会では、一番歌われる曲として第1位を獲得したこともあり、昭和60年4月2日には、藤田まさと賞第1回受賞という荣誉に輝きました。

川崎町では千葉幸雄氏の荣誉を讃え、平成13年本庁舎敷地内に歌碑を建立しました。

また、昨年までその功績に敬意を表し、全国「祝い船」歌謡大会を開催し、全国から参加された方々から、改めてその歌の大きさを知らされました。

まだまだ道半ばですよ、という穏やかな言葉ではありましたが、千葉幸雄氏曰く「これからも喜びを表現する詩を作り続けたい。」その眼光からは、志を成し遂げようとする力がみなぎっていました。



歌碑

【資料提供：川崎町立川崎小学校】

さやま きちう えもん
佐山 吉右工門 (明治^{1896年}29年11月3日～昭和^{1982年}57年6月13日)

【主な業績】 宮城蔵王支倉豊年踊の普及に尽力

【業績の概要】

支倉地区は伊達政宗公の命により慶長18年(1613年)欧州派遣された支倉六右衛門常長にゆかりの深いところで、近くの円福寺には常長の墓や遣欧使節にかかわりのあった人の墓と言われる「いかり印」の墓があります。

五穀豊穰の祈願と収穫への感謝を込めて藩政時代からうら盆に演じた豊年踊り。

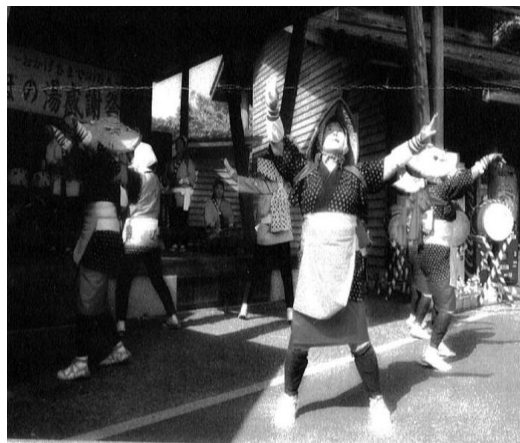
佐山家が代々伝えてきたと言われていたますが、佐山吉右工門氏が「健全な娯楽が無かった農村に皆と一緒に楽しめる踊りを」と豊年踊りの会を立ち上げたようです。

郵便局長の仕事の傍ら、終戦直後、宮城県の懇請により進駐軍慰安演芸会に出演し、司令官の激賞を受け、全米に映画で紹介もされております。国内においても数多くの公演を重ねながら研鑽に努め、たくさんの方々から賞賛をいただきました。

現在も故佐山吉右工門氏の意志を継ぎ、「宮城蔵王支倉豊年踊保存会」として川崎町は勿論、県内外のイベント等に出演しています。スペイン国コリア・デル・リオ市に建立された支倉常長像の除幕式においても現地出演し、喝采を浴びるなど、国際親善の役割も担ってきました。

地域における夏祭りにおいても、率先して盆踊りの囃子等に協力しております。

また、地元の小中学校においても郷土芸能伝承の出前授業を行っており、地元川崎町立富岡中学校文化祭では生徒全員による支倉豊年踊りが披露され、保護者は勿論、地域の方々の楽しみの一つとされています。



【資料提供：川崎町立富岡中学校】

きくち たへえ 1755年 1825年
菊地 多兵衛 (宝暦5年～文政8年)

【主な業績】上滝不動尊の山門の造営，年貢の減税に尽力

【業績の概要】

江戸時代の半ば過ぎのことです。百姓は田んぼで穫れた米の中から，年貢として約半分を領主に納めなければならず，日照りや大雨，洪水などで米がろくに穫れない年でも，年貢はいつもの年と同じ量でした。その上，橋を架けたり，道を直したりするための人夫としてかり出されました。従わない者は五人組制度で見張りをさせられ，容赦なく罰を与えられました。逃げることもできず，みんなが集まって相談することすら禁止されていた時代でした。

文政6年（1823年）のことです。丸森では，大水で米も野菜も穫れず，田畑も荒れたままでした。それでも壊れた道路を直す人夫にかり出され，「このままではみんな飢え死にしてしまう。」「年貢を減らしてもらえないか。」と，道普請みちふしんに集まった男たちが言い出しました。そして，近くの役人ではなく，領主である亙理の伊達藤五郎にお願いする手紙を書いてくれないかと，肝入だった菊地多兵衛に相談しました。多兵衛は，困った人の話を聞いたり，お世話をしてくれたりして，みんなから慕われていました。

その頃多兵衛は，不動尊の山門を13年かけて作っている最中でした。あと少しで完成する山門をながめながら，「ここで訴えを出したら，一揆を起こしたとして捕まって必ず牢に入れられてしまう。みんなをそんな目にあわせるわけにはいかない。かといって，みんなの気持ちは収まらないだろう。ここは，自分一人でやるしかない。」と考え，たった一人で殿さまの住む仙台に向かいました。仙台で殿様を見かけた多兵衛は，その前に進み出て手紙を差し出しました。案の定，多兵衛はすぐに捕えられ，牢屋に入れられてしまいました。手紙も取り上げられてしまいました。それから2年間，何の取り調べもないまま，多兵衛は牢に入れられ，ついに牢の中で亡くなりました。

多兵衛や村人の願いは，すぐには聞き入れられませんが，取り立ては少しずつゆるやかになっていきました。命をかけた多兵衛と村人の思いが通じたのです。感謝の気持ちを表して，村人は多兵衛のことを「義民・多兵衛」と呼ぶようになりました。

多兵衛が手掛けた不動尊の山門は昭和56年（1981年）に完成し，町の歴史を伝えるものとして有形文化財に指定され，町の神明社や不動尊公園の中には，「義民・多兵衛」の碑が建てられています。多兵衛は，田んぼのあぜ道に，虫退治のために松明をたいていました。その後「たけや火」として多兵衛の霊をなぐさめる行事になりました。



【資料提供：丸森町立丸森小学校】

すずき さぶろう 1895年 1973年
鈴木 三郎 (明治28年～昭和48年)

【主な業績】 丸森町百々石公園の設立，町会議員・丸森町消防団長として活躍

【業績の概要】

丸森橋を渡るとすぐに，観光名所の一つである「百々石公園」があります。桜やつつじの美しい公園で，伊具盆地を一望できるようにと設立され，現在町の人たちの憩いの場となっています。

鈴木三郎は田町青年会を結成し，社会奉仕・地方産業開発に情熱を注ぎ，陣頭に立って活動しました。三郎の功績を讃えて建てられた石碑があります。大正12年に百々石公園保勝会長となり荒廃した公園再建にあたりました。寝食を忘れ歟をふるい，各界に協力を要請するため東奔西走して，百々石公園は町の誰もが楽しめる公園に生まれ変わりました。当時は，たくさんの人が訪れ，すべり台を楽しんだり，山の上まで続く出店に人の列ができたりとにぎわいを見せました。



三郎は，代々大工をしている家に生まれ，5人兄弟の2番目で，おじいさんおばあさんに育てられました。いつも弟子が3人ほどいて，寝食を共にしていました。「やる！」といったらやり通す，一本気な性格で，丸森町議会議員と消防団長を務めました。

現在の丸森中学校の土地問題が浮上した時に，広い土地が必要なため桑畑の買収を推進しました。当時丸森町は，養蚕業が盛んで反対する声が多く，時には夜，通りを歩く酔っ払いから「三郎のばかやろう！」と言われても，丸森町の教育のためにくじけずに尽力しました。



昭和28年3月に丸森町で大火事が起きました。子どもの火遊びが原因で，納屋のかやぶきに火が燃え移り，町の中心の半分が焼けてしまいました。強風の影響もあり，布団屋の綿花に燃え移って，それが風で飛ばされ2キロ以上先の町まで火の粉が飛びました。その時，消防団長だった三郎の指揮により，伊具地区全ての消防団を率いてポンプ車を使って消火活動を行い，無事鎮火しました。

三郎は，丸森小学校の出身で，字が大変丁寧で，旗揚げの字も上手に書きました。青年団の頃，仲間とともに芝居をするなど，人前に入るのをいとわない性格でした。亡くなるまで町消防団長を務め，町議会議員として丸森町の発展のために心血を注ぎ，昭和41年勲五等双光旭日章を，昭和48年には正六位を受章しました。現在，丸森町には三郎の子孫が「鈴木工務店」として，代々の技を受け継いでいます。

【資料提供：丸森町立丸森小学校】

さいとう あつし 1890年 1980年
齋藤 富 (明治23年～昭和55年)

【主な業績】中谷地堤防の築堤，長内前堤防のかさ上げ工事，館矢間揚水機場建設，楽寿会設立

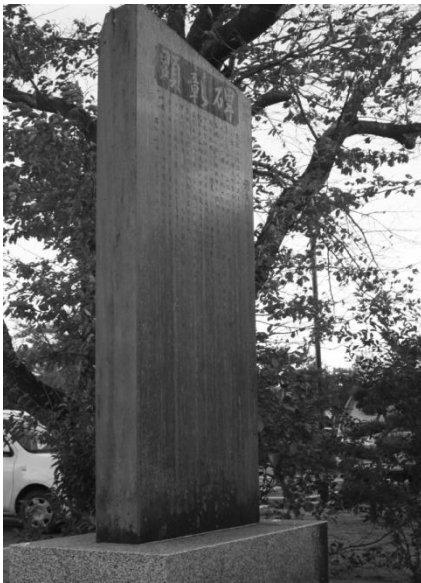
【業績の概要】

館矢間小学校正門の脇に顕彰碑が建てられています。碑は、楽寿会の会員の方々が、齋藤富先生の功績を称え、後世に残すために建立しました。

齋藤先生は、明治23年館矢間村に生まれ、遠田郡二郷小学校の教員として採用された後、27才で桜小学校の校長になり、丸森町、柴田町、角田市、仙台市の小学校で25年間連続して校長の職務を行いました。

また、各勤務校では、新教育の理論と實際を研究し、全国に公開してきました。昭和4年の世界の新教育会議には、日本の優秀実施校として丸森小学校が推薦されました。

さらに、宮城女子師範学校の先生や宮城県筆頭県視学となり、宮城県下の教育行政の仕事も行いました。



退職後は、館矢間村長に就任し、2期務めました。村長時代の特筆すべき業績に、中谷地堤防の築堤と長内前堤防のかさ上げ工事があります。

阿武隈川沿岸は、昔から大洪水が起こり、水害の被害が絶えませんでした。館矢間の中谷地地区は無堤防地帯で、洪水のたび大きな被害を受けていました。

そこで、村議会の議決を経て「中谷地堤防特別委員会」を設置し、宮城県議会、東北建設局に請願、国会で請願採択になり、昭和25年4月建設大臣から認可され、国直営の大事業として行われました。堤防の完成により、肥沃な土地で稲作が盛んになりました。

その後、町村合併の時には、丸森町長職務執行者及び館矢間支所長となり、次に町議会議員にもなりました。

また、丸森町公民館長として社会教育行政に貢献し、昭和35年には国の政策に先行して館矢間楽寿会の創設に尽力しました。

最後は、館矢間土地改良区理事長として揚水機場を新鋭設備に改善し、館矢間地区水稻、その他農作物栽培用水の心配がなくなるように力を尽くしました。

昭和37年には数々の功績が認められ、教育功労者として文部大臣賞も受賞しました。

参考文献：私のライフサイクルの業績（齋藤 富著）

：わが郷土館矢間の歴史（丸森町館矢間の歴史編集委員会）

【資料提供：丸森町立館矢間小学校】

もり けんじろう 1883年 1966年
森 健次郎 (明治16年～昭和41年)

【主な業績】 丸森町の初代町長として、町政の基礎づくりに尽力

【業績の概要】

丸森町は、昭和29年12月1日に、2町（丸森・金山）、6村（筆甫・大内・小斎・館矢間・大張・耕野）が合併して誕生しました。8つの町と村が一つになって、新しい町づくりを始めるということは並大抵なことではありません。新しくできた丸森町をどのようにしていくのかという計画を立てたり、それまで、町や村ごとにばらばらだった手続きの決まりなどを整えたりする仕事を短い期間でこなしていかなければなりませんでした。また、町役場以外にも、小学校や中学校の校舎や体育館を新しくしたり、建て直したりしなければなりませんでした。そのために、たくさんのお金を町で用意する必要もありました。



このように新しい町づくりをすすめていく大切な時期に、町のリーダーとして力を尽くされたのが、森健次郎丸森町初代町長さんです。森健次郎さんは、昭和29年に丸森町町長に選ばれ8年間、昭和37年まで町の発展のため、町政一筋に力を尽くされました。

新しい町づくりが始まった頃、大きな問題が立て続けに発生しました。昭和31年7月には2日間にわたって降り続いた梅雨によって、町内のほとんどの河川から水があふれ出してしまう水害が起きました。翌年5月には、急に気温が下がり農作物などが霜によって大きな被害を受けてしまいました。さらに、33年9月には台風21号と22号が丸森町を通過し、またしても洪水の被害を受けてしまいました。この台風では、道路や橋の被害だけではなく、農作物にも大きな被害を受けました。丸森町の人々の収入が落ち込む日々でした。

度重なる自然災害のために、町づくりに使える丸森町のお金はどんどん足りなくなっていました。丸森町のために何かをしたいと思っても、お金がないために事業を進めることができなくなっていました。

そのような中でも、森健次郎さんは、「住民の福祉（幸せ）を何よりも大切にする」という信条をもって、丸森町をよくするために日夜、仕事に励まれました。そして、森健次郎さんが先頭に立って町づくりに取り組む姿を見せることで、災害に打ちひしがれて心も体も疲れきっていたたくさんの方の人たちを勇気づけようと奮闘されました。

町づくりに使えるお金を確保するために、公用車での送迎を断り、毎日お弁当持参で路線バスに乗って役場まで通われたそうです。このようなことをこつこつと積み重ねて、町のお金を節約し、町の人たちが心待ちにしていた役場の庁舎や学校を建設することができるところまでこぎつけました。

新しい町づくりには長い年月がかかりました。森健次郎さんが町長の仕事をやめられてからも、いつも丸森町のことを気にかけていました。工事現場で働く人たちから「陽の照らない日はあっても、元の町長さんを見かけない日はない。」といわれるほど、学校の建築現場に、毎日足を運ばれてその様子を見守られていたということです。

参考文献 『丸森町史』、『広報まるもり縮刷版』

【資料提供：丸森町立小斎小学校】

すごう たけじ 1899年 1978年
須郷 武治 (明治32年～昭和53年)

【主な業績】金山地区の発展

【業績の概要】

須郷武治氏は、若者に対していつも次のようなことを語っていたそうです。「どこにいても故郷を忘れてはいけない。故郷は宝である。故郷の人々を愛し、よき伝統を育ててもらいたい。」との言葉です。(長男道也氏)



こうした須郷氏はどんな人で、故郷のためにどんなことをしたのかを紹介しましょう。

須郷氏は明治32年10月25日、金山町字谷地木戸（現丸森町金山）に生まれ、金山高等小学校を卒業しました。18歳（大正6年）の時、東京にある工業商会に入社しました。46歳（昭和20年）には社長、70歳（昭和44年）には取締役会長になりました。

【金山町に多額の寄附を贈る】

○ 金山地区では、農業が盛んでした。

しかし、水田に水を引くことに大変な苦労がありました。それは、田植え時期になると、農家の人々が、国道沿いの用水路に水を流し込むため、土豪を積んで、山居地内の雉子尾川を堰きとめる仕事でした。その仕事には大変な時間と労力がかかったそうです。

そのことを知った須郷氏は、昭和30年ころ、雉子尾川から水をくみ上げ、送るためのポンプ一式（時価50万円）を寄附し、金山山居に設置しました。

そのことによって、新田耕土の水不足が解消したと言われています。

○ 金山公民館長兼金山図書館長である星泰三郎氏は、一日も休むことなく地区の活動を進めてい



丸森町立金山図書館は、昭和五十一年九月建設に着手し、その際須郷武治氏より浄財壹千万円の御寄附を基金として金山地区民の協力のもとに、昭和五十三年三月完成した。
 愛郷の念篤く、多額の御芳志を賜わった、須郷武治氏の事蹟を後世に伝えるため、この顕彰碑を建立するものである。
 昭和五十三年三月
 丸森町長 二瓶 泰助

ました。そのことに感激した須郷氏は、星館長に対して、高額の基金を寄贈しました。

これをきっかけにして、金山に立派な図書館が建設されました。金山図書館は、地区民の教養と文化の向上に大変役立っています。

須郷氏の業績を称え、金山図書館前に左のような碑が建てられました。

【金山町の若者を生かし、育てる】

○ 工業商会は、須郷氏が勤めた会社です。須郷氏は、その会社に金山町出身の若者を積極的に採用しました。昭和35年には、社員総数178名の内、約1割も金山町出身の人たちで占めるほどでした。

○ 須郷氏は、「在京金山会」の副会長を昭和38年から9年間、昭和49年からの2年間は、会長を務めました。

在京金山会は、故郷金山町を離れ、東京や関東地方で暮らしている人たちの会です。その目的は「金山町出身の人たちの交流を深めること」と「金山町の発展に尽くすこと」です。

その会の事業で特徴的な取組は、

金山町の優秀な青年や将来の金山町を担う青年を東京に招待するというものです。しかも、東京招待にかかる費用のすべてを、在京金山会が負担しました。

東京に招待された方々の中には、現在金山の発展に力を尽くしている人がいます。

その一人、第1回の招待者で、現在、金山まちづくりセンター長として活躍されている原眞吉氏は、当時のことを上のように語っています。

私が東京に行ったのは、二十八歳の時でした。
 金山ではできない経験をたくさんさせていただきました。洋食をご馳走になり、ナイフとフォークの使い方を勉強したり、国会議事堂や農業大学、農業試験場を見学したりと、何もかも初めての体験でした。農業大学では、当時は大変珍しかった花を育てる取組を見て、こんな農業もあるのだと大変驚いたことを今もはっきり覚えています。それまでは、金山のことしか知らなかったもので、もの見方や考え方が、少し変わったと思います。また、いつまでも金山のことを心に掛けてくださっている先輩方をすごいと思うとともに、金山のことを誇りに感じました。

このように、須郷武治氏は、金山を離れた後も、故郷に思いを馳せ、愛し続けた人でした。

【資料提供：丸森町立金山小学校】

さとう とらのすけ 1902年 1988年
佐藤 寅之助 (明治35年～昭和63年)

【主な業績】丸森町長（2期8年）宮城県議会議員（2期）

【業績の概要】

佐藤寅之助は、明治35年、当時の大内村伊手（現在の丸森町大内）に生まれました。大内村尋常高等小学校を卒業し、福島県警察署長、宮城県警刑事部長等を歴任した後、昭和38年丸森町長となり、農林業の振興のため、様々な農林業の近代化と新しい農家経営の確立と育成に尽くしました。

当時、丸森町では、高度成長による都会への人口流失が多く、これを防ぐために工場の誘致を積極的に行いました。数社の工場を誘致し、農林業の近代化等による余剰労働力の活用、特に婦人層の職場開拓に努めました。

また、豊富な観光資源の開発に努め、自然を生かした休養と健康な観光地にするため、町内の景勝地にキャンプ場と国民宿舎「あぶくま荘」を開設、さらに舟下り観光事業「阿武隈ライン舟下り」を設立するなど、観光客の誘致と観光施設の充実に尽くしました。

さらに、それまでの木造建築の町立病院を現在の110床の近代的な病院に改築、完全看護体制を敷いたほか、福祉センター、母子医療センターを建設、母子衛生の普及に努め、乳児の死亡率ゼロを実現しました。教育問題にも深い関心を抱き、教育施設の充実に努めました。特に分校児童の教育向上のため、9分校中2分校を本校に統合、スクールバスを配置しました。昭和43年には、町の奨学金制度を創設し、向学心に富む学生の育成にも尽力しました。

こういった業績の中で最も大きいものは、町民80年来の夢とされていた、国鉄丸森線の建設です。開通のために様々な活動に取り組み、昭和43年4月、丸森駅と東北本線槻木駅間を開通させるとともに、丸森駅前の都市計画整理事業を実施し、過疎化の進む町の活性化を強力に推進しました。

丸森町長を2期務めた後、昭和50年4月、宮城県議会議員に当選しました。当時の本県最大の課題であった「水田利用再編対策」の実施に取り組み、本県が国の食糧基地として発展する基盤を確立しました。

また、警察OBとしての豊富な知識と経験を生かし、県内の交通安全運動を推進し県民意識の高揚に努め、交通安全施設の整備充実など総合的な安全対策にも全力を尽くしました。



【資料提供：丸森町立大内小学校】

おとこざわさんのすけ
男澤三之助
おとこざわ かずお
男澤一男
おとこざわ みよ
男澤美代

(筆甫小学校吉田分校勤務 ^{1907年}明治40年~^{1917年}大正6年)
(筆甫小学校吉田分校勤務 ^{1944年}昭和19年~^{1949年}昭和24年)
(筆甫小学校吉田分校勤務 ^{1949年}昭和24年~^{1969年}昭和44年)



【主な業績】筆甫小学校古田分校における生涯をかけた分校教育

【業績の概要】

筆甫小学校古田分校70年の歴史の中で断続的ではありますが、およそ60年に渡って教鞭をとったのが、男澤先生三代です。その中でも男澤美代先生は20年間、山間へき地の古田分校を一度も離れることなく、昭和44年3月古田分校廃止の日を教職生活最後の日とするまで、分校教育に生涯をかけました。

美代先生が、夫（一男）の赴任と共に、古田に住むことになったのは、昭和19年の9月です。仙台、東京、横浜と生活をしてきた美代先生にとって、へき地古田の地は異郷の感がしたに相違ないと思います。その時を回想して美代先生はこう書いています。

「私が主人について古田分校に行ったのは、昭和19年9月のことでした。熊の出る土地と聞かされ、主人の転任に従い、バスも通らぬ四面山にかこまれた細い坂道を連れて行かれ、右も左も山また山、聞きしにまさる知らない土地で、不安ばかりが先立つのでした。」

父（三之助）が歩んだ道（吉田分校で教鞭をとる）を、夫（一男、当時49歳）は継承するため、決断の赴任をしました。しかし、病のため倒れ、昭和24年3月末で退職しました。遺児四男一女を抱え、途方に暮れたにちがいない美代先生に、部落の人々は、ぜひこのまま分校に残って教育を続けて欲しいと強くお願いしました。その強い願いを拒みきれず、また、父と夫の志を継ぐことの意義を思い、古田分校に留まる決心をした美代先生は、昭和24年3月31日付けで筆甫小学校助教諭として発令を受け古田分校に勤務し、昭和27年10月に教諭となってから、以後20年間、山間へき地の古田分校を一度も離れることなく、昭和44年3月、古田分校廃止の日まで先生としてへき地分校教育に尽くしました。

当時、水と言えば、手桶をさげて50メートルもある湧水の井戸まで汲みに行きました。隣と言えば一山、二山越したかげにあり、日用品を求めるには10キロメートルの山道を歩いて丸森町まで、一日がかりで買いに行かなければなりませんでした。子どもをおんぶしてのことで自分で持って来られる分しか買ってることが出来ませんでした。その中、終戦をむかえ食糧難で、山へ行ってはフキ、ワラビを採って来て米の代わりに食べました。医者もいない山村の生活はあまりにもみじめだったそうです。出張の時は夜中の2時頃に起き食事の用意をし、子どもたちの世話を一人はおんぶ、大きい子は子守りとして連れて行きました。

敗戦後の物が無い時代、分校の子どもたちの頭髪はクシが通らず、アカだらけでした。見かねた美代先生は、進んで自宅の風呂を開放し、バリカンとカミソリを買って散髪も行いました。また、竹の輪に油紙をはったり、鈴を付けてタンバリンを作ったり、給料をさいて簡易水道のポンプや校舎を修理したことも再三でした。後にへき地振興法、理科教育振興法により、分校にも教材施設が充実されることになりました。さらに、分校生の劣等感をはねのけるため、ソロバン練習を取り入れ、4年間でほとんどの児童が8級から2級の検定に合格することができ、胸をはって本校に行かせることができました。

【資料提供：丸森町立筆甫小学校】



さいとう きそうじ 1803年 1876年
齋藤 喜惣治 (享保3年～明治9年)

【主な業績】 耕野村民への教育

【業績の概要】

明治時代の前の江戸時代には、「寺子屋」「家塾^{かじゆく}」という学校があったのですが、学校といってもそのほとんどは、教師（塾長）の自宅が教場（学校）でした。耕野にも「家塾」があり、塾長（先生）もいました。

耕野村の家塾の塾長であった齋藤喜惣治先生は、享和3年（1803年）、現丸森町耕野に生まれました。喜惣治先生は、小さいころから読書が好きで、よく手紙（文書）を書き、また、算術（算数）も得意でした。とても礼儀正しく、温和であり、礼儀作法の小笠原流の大家でもありました。何事にも熱心に事にあたり、また、神仏を敬い、徳のある人でした。立派な人でしたので、安政年間（1854年～1859年）に、選ばれて子どもたちの先生（塾長）となりました。

その当時の家塾の勉強とは、『読み、書き、そろばん』で、読書、習字、算術が主でした。読書における教科書は、『今川状、庭訓往来、^{いまいわじょう ていきんおうらい} 小学句読、^{しょうがくとう} 四書、^{ししよ} 五経』^{ごきょう}などでした。習字の教科書は、『いろは、^{なかしらじ} 名頭字、^{こうやむらやしきめい} 耕野村屋敷名、^{いぐぐんそんめい} 伊具郡村名、^{せんだいほんぐんめい} 仙台藩郡名、^{にほんこくめい} 日本国名』などで、一週間練習してから浄書（清書）して先生に見てもらい、合格すれば次の手本へ進むことができたのです。算術にあっては、読書と習字の学習をしっかりと身に付けた17、18歳の若者が、秋から春にかけて夜間に学習しました。冬は毎日算術の練習をし、30歳になるまで学習を続けたのです。喜惣治先生は、やさしく、熱心に教え続けました。塾生に怠ける者はいなかったそうです。その当時、字を書くことができる人はほとんどいなかったのですが、喜惣治先生の教えで、漢字を読むこと、手紙を書くこと、計算することができる人が増えていきました。

喜惣治先生の心は、いつも村人の暮らしのことに向けられていました。喜惣治先生の生きた天保年間、特に、天保4年（1833年）から天保9年（1838年）までは、全国的に大凶作でした。食べるものがなく、多くの餓死者が出ました。そんな中、喜惣治先生は、天保6年（1835年）に、農業や養蚕の指導員となりました。

喜惣治先生は、農業や養蚕を向上させるにはどうしたらよいのか、よい方法はないのか、いつも考えていました。自分で学び、体験し、研究を重ね、その成果を村人に熱心に教え伝えました。

村人のために常に働き続けた喜惣治先生は、天保10年（1839年）に耕野村の肝入（村長）になり、さらに安政4年（1857年）には伊具郡西根の大肝入（郡長）となりました。文久元年（1861年）に病気で辞めるまで、村民のために働き続け、明治9年（1876年）に病気でなくなりました。

喜惣治先生の偉業を後世に伝えようと明治31年（1898年）に喜惣治先生の孫と教え子が集まって相談し、^{けんしょうひ} 顕彰碑を建てました。喜惣治先生の孫とは、伊具郡で初めて衆議院議員になった齋藤信太郎です。

喜惣治先生の顕彰碑は、耕野の桃泉寺の参道内にあります。



【資料提供：丸森町立耕野小学校】

【主な業績】彫刻家

【業績の概要】

明治45年7月4日に、宮城県黒川郡落合村舞野（現大和町）で生まれた佐藤忠良先生は、幼少の頃、父の実家である伊具郡大張村（現丸森町大張）で過ごしました。大張では、豊かな自然の中、家から歩いて阿武隈川に行き、川遊びなどをしました。小学校への入学は、母の実家の移住先である北海道夕張に移ってからです。

自伝には、『私が彫刻を続けてきたことを振り返るとき、小学校での最後の2年間担任だった坂下先生が最初のきっかけをつくってくれたような気がする。（中略）先生は、歩きながらいろいろな話をしてくれた。他の授業をしているときでも、「忠良は絵を描いていい。」と云ってくださることがたびたびあり、私は得意になって床の上に大きい画用紙を広げ、ひとり、絵に没頭したものである。』（出典「つぶれた帽子」中央公論新社）と書いています。



20歳になって、本格的に絵画の勉強をするために上京し、美術雑誌などで西欧近代彫刻に接し、しだいに彫刻家を目指すようになり、22歳で東京美術学校（現東京芸術大学）彫刻科に入学しました。40歳の時に〈群馬の人〉を出品したところ、国立近代美術館に収蔵されました。その後、現代日本美術展で佳作賞を受賞し、さらに、高村光太郎賞、毎日芸術賞、芸術選奨文部大臣賞など数多くの賞を受賞しました。学生時代から、ひたすら人間像をつくり続けてきた先生は、自伝に、『いい絵画、いい彫刻の本物をたくさん見ることで「彫刻家の眼」は養えると思う。』（出典「触ることから始めよう」講談社）と書いています。

66歳の時に、故郷である宮城県で、仙台市彫刻のあるまちづくりの第一作として、台原森林公園に、風に向かって立つ若い健康な女性をイメージした〈緑の風〉を設置。69歳の時に、フランス国立ロダン美術館で、日本人初の個展を開催、74歳の時には、東京造形大学名誉教授に就任しました。

これらの偉業により、平成2年には、宮城県美術館に「佐藤忠良記念館」が開館、平成7年には、大和町に「佐藤忠良ギャラリー」が開設され、平成12年には、宮城県美術館名誉館長にも就任しました。

丸森町では、「町民が高いレベルの作品にふれ、豊かな心を育む一助としよう。私たち共通の宝として後世に残そう。」と町商工会長等が発起人となり、多くの方の賛同を得て、昭和61年、丸森町役場に、〈シャツブラウスの娘〉と〈冬の像〉が設置されました。平成8年には、「齋理アカデミー」において講演会が行われ、その中で先生は、「若い時はうんと失敗しろ、失敗して恥かいて汗かいてやり直せと、よく学生に言っている。」と話されました。

平成23年3月30日、ご家族や多くの方に惜しまれお亡くなりになりました。享年98歳でした。

自伝には、『今は、印刷も電波も発達して、絵や彫刻も、作品集やテレビの美術番組を見ただけで見てしまったような、解ってしまったような思いがし、本物に触れるために足を運ばないですんだような気がして、憧れからだんだん遠ざかりつつあるのではないだろうか。』そして、『22歳ではじめて粘土を手にしてから50余年、私はひたすら土を手にしながら来てしまった。（中略）こんな原始的な作業を続けていられるのも、作ることへの憧れがあるからであろう。』（出典「つぶれた帽子」中央公論新社）と結ばれています。常に本物を追い求め、一生涯を彫刻にささげた人生でした。

その後、平成24年11月23日、宮城県美術館において、「生誕100年／追悼彫刻家佐藤忠良展」が開催され、多くの方が訪れました。絵本「大きなかぶ」の原画は、佐藤忠良先生が描かれました。

《写真提供：宮城県美術館》

【資料提供：丸森町立大張小学校】

さの りはち
佐野 理八 (天保15年2月15日~大正4年8月14日)

【主な業績】近代製糸業の発展，近代的経営理念の実践

【業績の概要】

明治19年（1886年）7月，佐野理八は丸森町金山に佐野製糸場を創立しました。フランス製機械を備えて生産された良質のエキストラ糸は，アメリカに直輸出され，佐野シルクの名は国内外に広まっていきました。創業時は熟練の工女90名を中心に運営されていましたが，着実に業績を伸ばし，理八が亡くなった大正4年（1915年）には男性工員70名，430名の工女を擁するようになっていました。



近代工業の幕開けとなった明治時代，女工哀史の話も聞かれる中，佐野製糸場にあっては，理八の時代を先取りした模範的な経営理念のもと工場運営が行われていました。工女全員は，工場敷地内の宿舎に入居し，食費は全額会社負担で，品数も多く農家の食卓より数段良かったといわれています。時には，社長と工女が同席した会食会も行われていました。また，全額会社負担で仙台松島，東京日光方面への慰安旅行を実施するなど，当時としては画期的な実践を行っています。

明治38年には月給制を取り入れ，貯蓄の実践を励行させたため，長年勤めた者は，嫁入り費用を用意できるほどの貯蓄ができたそうです。

工女たちは，年若くして親元を離れて暮らす者が多かったため，家庭に入ってから一般教養が不足しているとそしられないようにとの配慮から，秋冬の夜長には，読み書きそろばん，裁縫を中心とした夜学を行いました。また，明治21年（1888年）工女の一人が亡くなると，工場敷地内に2階建て病室を建築し，工場嘱託医を置きました。また，亡くなった工女については一人一人の墓地を建て供養しました。それらは一大墓群として現在も残されています。

理八は，天保15年に滋賀県佐野村の農家の次男として生まれました。父は相当の知識も地位もあり村役を務めるほどの人物でした。幼いころの理八は，乱暴者の餓鬼大将として近隣に知られ，両親への苦情は絶えなかったといえます。しかし，父親は責めることなく，むしろ息子の成長に期待を寄せていました。その理八も12歳の時，生糸・呉服を扱う豪商茗荷家に丁稚奉公に出されます。自由奔放な幼少期を過ごした理八にとって，辛い日々ではありましたが，餓鬼大将の面目にかけて，家に帰ることは思いとどまったといえます。理八の利発さは，主人の目にも留まり，近江本店に2年勤めたのちは，京都支店そして江戸支店へと移り，若くして中堅の番頭格に抜擢されます。京都時代には，大商店での勤めに健康を害しましたが，医師の健康法に従い快復してからは，一度として服薬することはなかったそうです。こうした少年期の生活体験が工女たちへの手厚い経営方針の基になったと考えられます。

理八は，製糸業のみならず，養蚕農家に欠かせない天気予報を取り入れようと全国2番目の私設測候所を設置したり，養蚕農家の育成や奨励策を講じたりと日本の近代産業の先駆者として数多くの足跡を残しました。国からは，多年にわたる公益の事業に貢献したとして勲六等瑞宝章のほか，死亡時には，藍綬褒章飾板銀杯が贈られました。

【資料提供：丸森町立丸森中学校】